

出来事の解釈学——ハイデガーにおける渦動の思考

齋藤元紀（高千穂大学）

「解釈学が注目を向けられるのはいつも、個性的で歴史的な現存在が学問上の喫緊の要件となるようなある大きな歴史的運動においてでしかなく、その後は再び闇に消え去ることになる」（ディルタイ『解釈学の成立』）。1900年に解釈学の盛衰についてこう述べたとき、他ならぬディルタイ自身もそうした歴史的な学問運動の新たな発端に立っていると自負していたに違いない。それが誤りではなかったことは、以後解釈学がハイデガー、ガダマー、リクール、ローティ、ヴァッティモらをとおして大陸哲学のみならず分析哲学をも巻き込んで大きな発展を遂げ、批評理論や社会学や政治学、メディア論などの周辺領域へもその影響を拡大させてきた点に示されている。

しかし21世紀に入ってはや四半世紀に手が届こうという現在、解釈学は果たしてなおも興隆していると言えるだろうか。ガダマーとハーバーマスやデリダとの論争を皮切りに、現在に至るまで解釈学は繰り返し批判の的となってきた。そのこと自体が現代哲学における解釈学の確固たる立場を証立しているとも言えようが、しかし当の解釈学の内実は十分に掘り下げられてきただろうか。相対主義という皮相な批判は措くとしても、解釈学は「対話」という理念のもとに普遍性へとその理解の地平を押し広げる一方で、その名称に過度なインフレーションを引き起こし、解釈の営みを極端に平板化してしまったのではないか。「神学」という由来が十分に顧みられず、言語に対する「技法」としての役割すら見失われ、諸思潮との離散融合を繰り返すばかりの解釈学に残された仕事など、せいぜい過去の思想を「読み解く」だけの訓誥学ではないか。今にも闇に消える寸前、最後の光芒を放つ星屑が、目下の解釈学の姿なのではないか。

解釈学はなおも存続しているのか、それともすでに終わりを迎えているのか。終わりを迎えて久しいとすれば、解釈学は新たな始まりとなりうるのか。現代の「解釈学的状況」をめぐるこの問いに対して、しかし性急な回答は禁物である。ディルタイの洞察が正しいとすれば、解釈学の盛衰への問いを解く鍵は「個性的で歴史的な現存在」にある。解釈学の歴史を振り返るとき、この問いを問いかけるにふさわしい人物は一人しかいない。その主著で存在の問いを問うために解釈学を正面に掲げながら、その直後にあっさり捨て去った人物、ハイデガーその人である。周知のとおり、ハイデガーは神学研究に勤しんだ修学時代より親しんでいた解釈学を「事実性の解釈学」へと改鑄し、それをさらには『存在と時間』において「現存在の解釈学」へと彫琢することによって基礎存在論を展開したものの、その後は解釈学という名称を著作や講義でも用いることがなかった。その理由はさまざま考えられるが、いまだそれに対する決定的な答えが得られていないということ自体、解釈学の存亡にかかわる重大な「学問上の喫緊の要件」であろう。

もちろんこの問題を解く手がかりがないわけではない。ハイデガーが公に解釈学に立ち

返ったのは、『存在と時間』から約四半世紀を経た「言葉についての対話」(1953/54年)においてであったが、そこでは回顧的ながら、『存在と時間』は「解釈の本質をまずは解釈学的というところから規定しようとする試み」であったとした上で、「以前の立場」は「途上における一つの滞在地」にすぎなかったとされている(GA12, 93, 94)。思考の歩みのなかで変わらずにとどまるのは思考の「道」そのものであるが、しかしその「思考の道は、われわれがそれを前方にも後方にも進んでいくことができ、さらにはその道に戻ることで初めて前に進むことができるという謎」を孕んでいる(GA12, 94)。形を変えてはいるものの、ここには『存在と時間』の解釈学的循環にある種通じる発想が示されている。そうであるとすれば、『存在と時間』以降のハイデガーは、表立たないながらもこの謎めいた解釈学的循環の道を歩んでいったのだと推定できよう。じっさい1930年代以降のハイデガーは、哲学者たちとの「対決」と自身が呼ぶ存在史的《解釈》をとおして存在の問いを問い進め、循環の根拠を「原存在(Seyn)」の「出来事(Ereignis)」のうちに見定めてゆく。しかしこの「出来事」はまた「転回」として、解釈学に決定的な変転と解体を迫ると同時に、思考そのものへの歩みを先鋭化させてゆくことにもなる。

そこで本発表では、主として1930年代以降に焦点をあて、ハイデガーが「出来事」をめぐって歩んだ解釈学的思考の帰趨を究明することにしたい。ただし、すでに見たとおりこの時期には解釈学という呼称が抹消されているため、解釈の実質的な遂行そのものへの着目が必要となる。そこで本発表はひとまず『存在と時間』の解釈学を準拠枠としつつも、西洋形而上学の諸思想に対する存在史的解釈だけでなく、必要に応じて『存在と時間』およびそれ以前の思想との間を往還しながら考察を進めることとする。あえてこのような往還の道を進むのは、「循環」すらをも巻き込みながら、原存在の出来事に発する「渦動」のうちで変転するハイデガーの解釈学的思考の軌跡を見定めるためである。それによって本発表は、後期ハイデガーが最終的に逢着した脱解釈学とも呼ぶべき滞在地までの道のりとその意義を浮き彫りにしたい。またそれとあわせて、ハイデガーにおける解釈学の盛衰の理由を明確化すると同時に、ひいては現代における解釈学の存亡のゆくえについても見通しを得たいと思う。